

ミャンマーの大衆芸能ザッフェ

和田 美穂（国際NGO職員）

ミャンマーの大衆芸能ザッフェ（単にザッ）は、旅回りの一座によって、主にパゴダ祭りの時、夜10時から朝6時ないし7時まで、夜を徹して上演される。内容は、歌謡ショー、ダンス、芝居、お笑い、伝統舞踊など。観客は、ゴザの上で、うたた寝しつつ、徹夜で鑑賞する。観客数は、少なくても数百人、多いと数千人だろうか。

ザッが、海外でも、ヤンゴン在住外国人の間でさえも、それほど知られていない理由は、2005年の雨期明けまで、ヤンゴン市内での上演が禁止されていたためかもしれない。民主化運動が盛り上がりを見せた1988年以降、20年近くに渡り、数年の例外はあったとのことだが、ヤンゴン市内で上演されることはなかった。2005年、軍事政権が、首都をヤンゴンから新都市ネピドーへ移転を始めると時を同じくして、ヤンゴン市内での上演が許可され始めた。軍事政権は国民が多数集まることを恐れており、一時は、3人以上の集会には許可がいないと言われていたこともある。今のザッに政治的意味合いはないが、酒に酔った観客によりケンカが始まり、それが拡大し、人々の政府に対する、積年の不満や怒りに火をつけ、反政府暴動に発展することを軍政は恐れていたのだという。ザッのヤンゴン市内での解禁は、各地の少数民族の分離独立運動の多くを押さえ込み、民主化運動も厳しく弾圧し、ほとんど根絶した軍政の自信の表れなのかもしれない。

内容は座によって異なるが、夜10時の幕開けは、伝統歌謡で始まる。ザッの俳優、ザッ・ミンダーたちが、ミャンマーの民族衣装であるタイボン（上着）とロンジー（腰巻）にパナツ（ぞうり）、女優、ザッ・ミンダミーたちも華やかなインジー（ブラウス）とロンジー（腰巻）姿で現れ、叙情的なムード歌謡を歌う。その後、モダンな曲によるステージ・ショー。ヒップホップの格好をした俳優や、ミニスカートにハイヒールの女優が、ミャンマー語のロック、ラップ、バラード、ヒップホップを歌い踊る。腰履きのハーフパンツというヒップホップの格好や、足を出したミニスカートにハイヒールというのは、ここ数年、ジーパン姿を見かけるようになったヤンゴンでさえも、めずらしく、外国の香りのする服装である。海外の曲が歌われることはあるが、全てビルマ語の歌詞である。

ステージ・ショーの後は、芝居が始まる。貧乏なため結婚を許されなかった男が、出世して戻ってきて、かつての恋人と結ばれるといった話である。まだ、この国では、貧困や社会的階級の差が、恋愛の障害となっている。「金の斧、銀の斧」をミャンマーの田舎を舞台に翻案した劇を見たこともある。芝居の前にミュージカルのようなものがあることもある。

明け方4、5時ごろから、伝統舞踊が始まる。出演者は、スターである座長と男の踊り手2、3人に加え、伝統衣装を着たお笑い芸人ルーシンドー、女性の踊り手がそれぞれ8人ほど。スター俳優は、

ピンクや緑などの鮮やかな色の光沢のある布の上に、スパンコールで模様を描いた派手なロンジー（腰巻）に、光沢のある半透明の白いシャツ、肩には金色の飾り、頭には金色の冠という豪華な衣装で現れる。お笑い芸人と俳優の掛け合いあり、お笑い芸人による歌あり、俳優による歌あり。クライマックスは、俳優による踊りである。生演奏の伝統音楽に合わせ、古典舞踊を見せる。長年の鍛錬によって習得された、複雑で洗練された手足の動きをする。歌舞伎のような型があり、見得を切る。身軽な若い俳優なら、跳躍や回転やバック転も見せる。



高い人気のザップェ「コゼー」

伝統楽団サインワインは、舞台に向かって右下に位置し、大きな太鼓の担当者が、舞台を見て、お笑い芸人のジョークや、踊りの見得に合わせて、合いの手のように太鼓を叩く。他の奏者は、大きな太鼓の担当者のバチの動きを見て、合わせて小さな太鼓やシンバルを叩く。舞台と奏者の息の合った掛け合いは、生演奏の醍醐味である。

サインワインの主要な楽器は、パロンという、インドの太鼓タブラのような太鼓を10個、半円に並べたもので、太鼓ながら音階がある。他に音階があるのは、たて笛ネーと、ドラのような金属の円盤を並べたマウンである。ネーは、コブラ使いの笛のような不思議な音色で、マウンは鉄琴のような音がする。他に、大きさの違う太鼓、ドラ、シンバルなどがあり、5-7人で演奏する。

舞台右下にあるサインワインと反対、舞台左下にはバンドがあり、歌謡ショーの時、演奏する。バンドの構成は、普通、ドラム、ギター、ベース、キーボードの4人である。サインワインとバンドと一緒に演奏することはない。

ザットとは、本来は、仏教説話の劇のことだという。かつては、ステージ・ショーはなく、お笑いとお笑い芸人の後、仏教説話の劇を上演するのが、ザップェだった。数十年前に、ある座がステージ・ショーを始め、それが人気を呼んだことから、他の座もこぞってステージ・ショーを開始し、劇も、仏教的な内容から、現代劇になっていった。特に男性の観客は、ステージ・ショー目当てに来て、ステージ・ショーが終わると帰る人が多い。上演場所の入り口に掲げてある大看板は、伝統衣装を着けたスター俳優の絵であることから、今でも、ザップェの主要演目で売り物は伝統舞踊だとされているようではある。しかし、最後の古典舞踊が始まると、明け方で眠く、疲れていて、一刻も早く家で寝たいのか、席を立てて帰る人も多い。ビルマ人に言わせると、音楽、踊り、あやつり人形といった伝統芸能に興味を持つ人が少なくなっているのだという。

もうほとんど、ヤンゴンで上演されることがなくなった伝統芸能としては、アニェインがある。ザットでは、男性の踊り手がメインで、お笑い芸人と女性の踊り手もいるのだが、アニェインでは、女性の踊り手がメインで、お笑い芸人はいるものの、男性の踊り手はいない。パゴダ祭りで上演されるのはザットだが、かつて、地区の祭りではアニェインが、やはり夜を徹して上演されていた。ザットの多くは、特にヤンゴンでは、観客が入場料を払うが、アニェインは地区の住民が金を出し合って呼び、観客には無料で見せていた。男性の観客には、男性の踊り手がメインのザットより、女性が

踊るアニェインの方が人気があったとのことである。1988年以降、ヤンゴン中心部でのアニェインの上演も禁止され、アニェインの踊り子には、映画女優に転向した者もいた。その後、ヤンゴン市内のパゴダ祭りでのザッの上演は解禁されたものの、地区の祭りは未だに禁止されており、アニェインの上演もない。伝統芸能の本場、古都マンダレーでは、今でもアニェインは、小規模で上演されているとのことである。

あやつり人形も、ミャンマーの伝統芸能である。かなり大きな人形を、一人が動かす。王子や女王、庶民、伝説上の魔術師ゾージー、馬などの動物の人形もある。今では、観光客相手のレストランでしか上演されず、一般のミャンマー人が見ることはほとんどない。

ポー・チッ

20代半ば。飛び鳥を落とす勢いの、今、最も人気のある人気ザッ・ミンダー（ザッの俳優）の一人。テレビ・コマーシャルにも何本も出演している。地方出身ながら、政府主催の伝統芸能コンテストで、10代から何度も金賞を獲得し、将来を嘱望されていた。ヤンゴン文化大学に入学する予定であったものの、大学入学は取りやめ、雇われ座長として、一座を率いている。2008年12月のヤンゴン、カンドージー公園での巨大ステージでの公演では、ゴザ1区画の値段が、通常、人気のある座でも5千チャット（約400円）程度なのに、破格の2万チャット（約1600円）だった。1600円は、ビルマ人の感覚では、日本の数万円にあたる。日本人だと1区画に2人座るが、ビルマ人は、家族、友達同士、体を密着させ、4人以上座る。観客は数千人はいただろう。ステージの奥と左右に、巨大な液晶スクリーンを設置し、3台のカメラで別の角度から写したポー・チッの姿を同時に上映していたのが画期的だった。ただ、ポップソングの歌はあまりうまくない。伝統舞踊は、朝4時から7時まで、みっちり3時間行われた。若手の男の踊り手7人も交互に少しずつ踊りを披露したが、ポー・チッ本人が、舞台狭しと、跳躍したり、転げまわったり、端から端まで広い空間を使い、手を抜かない、全力投球の芸を見せた。ファン層も、中年女性の多い通常のザッとは違い、裕福そうな、最新のファッションの若い女性が多かった。歌っている最中に、次から次へとファンが舞台に近づき、おひねりやプレゼントを渡し、汗を拭き、サインを頼んでも、嫌な顔一つ見せず、一人一人、丁寧に対応しているところに、当人のまじめな人柄が出ていた。おひねりは、1000チャット札5枚、計5000チャット（約400円）を安全ピンに刺し、それを衣装の袖に付ける人が多いが、ドル札も交じっていた。2007年に国立劇場で公演した時は、こんな場所で公演できるとは光栄だと、最後に、舞台の上で号泣したという。ザッ・サヤー（ザッのオーナー）は、退役軍人で、政府関係に顔がきくらしい。座の規律の正しさが、舞台転換の迅速さや、芸人の無駄のない動きなど、舞台にもよくあらわれている。



「コゼー」のDVD

ティン・マン・サン・ミン・ウイン

20代前半。ポー・チットとは違い、ザッ界のサラブレッド。踊りの名手シュエ・マン・ティン・マウンの孫で、サン・ウインの息子であることを、芸名で示している。(ちなみにビルマ民族には苗字



ティン・マン・サン・ミン・ウイン座の花形役者

はなく、名前しかない。)父のサン・ウインが引退した後、父の座で、数年前から息子の当人が座長を務めている。ポー・チットのように大掛かりで、完成された舞台ではないが、当人と父の人柄の良さが出ていて、演出も、ほのぼのして家族的である。どの座でも、伝統舞踊では、女性の踊り手8人程度が必ず後ろに座っている。お笑い芸人にいじられたり、男性の踊り手とデュエットすることもあるが、多くの座では花を添えるために、無言で座って、ときたま、男性の後ろで少し踊るだけである。ティン・マウン・サン・ミン・ウインの座では、座長の彼が、女性陣一人一人と踊ったり、歌ったりする。お祖母さんの年齢の女性の踊り子が色目をつかいないながら、若い彼が、デュエットすると、観客に大うけしていた。知名度はまだないが、熱烈なファンもいるらしく、女性ファンから、おひねりとして、1000チャット100枚の札束(約8000円)を渡され、それで悠然とあおいで見せた。ビルマ人の感覚では、数十万円である。その時は、客席が騒然となったそうだ。

各座の座長それぞれに個性があり、杉良太郎ばりの流し目マダム・キラーもいる。伝統衣装をつけて、ブレイク・ダンスのようなヘンな踊りをする、人気ザッ・ミンダーには興ざめだった。若いながら、ヤンゴン文化大学で踊りの講師を務めるザッ・ミンダーの踊りが、最も正統で美しいと思うが、玄人好みらしく、ポー・チットのような大人気には至っていない。それでも、彼の出演料は、一晚、約2万4千円だそうで、学校教師の月給が3千円程度なので、学校教師の月収8ヶ月分を一晚で稼ぐことになる。ただ、家族4人で、子どもがハイスクールを卒業する程度の暮らしをすると、月に最低2万円はかかるので、学校教師は4千円では食べていけず、家で塾を開いたりして稼いでいる。それでも、人気ザッ・ミンダーの収入は破格といえる。それ以外の俳優、演奏者、スタッフの給与は、そう高くはない。彼らは、3-5日づつ、全国各地のパゴダ祭りを回り、むしろ掛けの芝居小屋の裏に天幕を張って暮らすという移動生活を続ける。仕事といっても、好きでなくては続かないと当人たちは言っている。

座の正確な数は不明だが、人気の座なら10くらい、中小も入れると、全国数十はあるのではないだろうか。ミャンマーでは、テレビ局は、政府の2局しかなく、検閲を受けた体制翼賛的な番組しか放映されない。映画はフィルムが高いため、年間10本程度しか撮影されず、映画館で上映されているものの多くは、実はミャンマー製VシネマのDVDである。娯楽の少ないミャンマーでは、ザップエの人気は、内容を観客の好むものに変質させながらも、今後も続くと思われる。